
ひ と り。

Akira*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとり。

【Nコード】

N71330

【作者名】

A k i r a *

【あらすじ】

「一人にして。」

彼女は口癖のようにこの言葉を繰り返す。

クラスメイトはギャルで言動が理解不能。

同級生には「あの子誰？」とまで言われてしまう程地味な彼女。

彼女 藤崎亜夜奈は、全てに疲れ、毎日のように屋上に入り浸っていた。

ある日、そんな彼女に“不思議”が訪れる。

いつものように屋上のドアを開けると、通常ではありえない光景が

広がっていた。

そしてここから、彼女の“不思議な御伽噺”が幕を開ける・・・。

プロローグ「a girl（ショウジョ）」

プロローグ「a girl（ショウジョ）」

ギイツ・・・

また、扉が開かれた。

おずおずとラインを越える“少女”。
それを冷ややかに眺める。

・・・嗚呼、始まるよ。

旋律が音を奏でる、抗えない悲劇の物語が。
ストーリー

クスツ・・・クススクスツ・・・

さあ、準備は良いかい？

“少女”が何をしようが、“少女”の身に何が起ころうが、誰にも
この事を話してはいけないよ。
何故なら、この事は誰にも秘密だったんだから。

僕は彼女の人生をずっと観て来たよ。

彼女の笑う姿も、怯える姿も、苦しむ姿も、死ぬ姿も、見飽きるく
らい、全部。

・・・でも残念な話だね。

今回は何だかハッピーエンドらしいんだ。
つまらないな、つまらないな。

僕は毎回彼女の苦しむ姿を見るの、とっても楽しみにしていたのに。
おかしいな、おかしいな。

さあ、準備は良いかい？

クスクスッ・・・

もうすぐ始まってしまふよ。

もしかしたら僕の大好きな悲劇・惨劇かもしれないよ。
帰るなら今がチャンスだよ？

彼女は今回どうなるんだろうね？

楽しみだね、楽しみだね！

殺すのかなあ？殺されちゃうのかなあ？

彼らに逢うのかなあ？逢わなくて済んじやうのかなあ？
それとも・・・

シンジツニタドリツイチャウノカナア・・・？

Words by spectator.

第一話「an imitation（ニセモノ）」

第一話「an imitation（ニセモノ）」

私は虚空を見つめていた。

今まで悩みなど無かった。

ただ一つあった事と言えば・・・人付き合い・・・かな。

私には“親友”と言える人は一人もなく、“友達”と言える人もいるのかどうなのか分からない位。

“友達”なんて偽物だと思ってたし、第一“友達”と言う物も分からなかった。

物心ついた時には女子の中で複数の集まりが出来ていて、私は楽に付き合える男子とばかり一緒にいた。

つまり、私は生まれきつての一匹狼だという事だ。

バーンッ！

「!？」

「あつちいゝ？またアンタココにいたのお؟؟ウチメツチャ探したんだけどおゝ！」

「ああ、ごめん翔^{かや}耶。」

「何かあ、皆が集まれて言うて来てえ・・・えつとあ・・・何だっけえ？」

「もういいよ、分かったから。もう少ししたら行くって言うといて。」

「ラジャッ！」

パタパタと走って行った安藤翔耶あんどうの背中を見て、私は溜め息をついた。

ちなみに“あっちい”と言うのは私に付けられたあだ名。

本名は藤崎ふじさき亜夜奈あやな。

翔耶に比べれば割と普通な名前なのかもしれない。

翔耶は物覚えが悪い。

それなのに彼女は最近私への伝言係となっていた。

休み時間になると毎回屋上に行く私に話しかけられない人達は、人懐っこい性格の翔耶に伝言を頼む。

とは言っても彼女は先程の通り物覚えが悪いので、無論、ほとんど伝わっていないのだが。

人からの伝言は3歩歩けば忘れてしまうと行って良い程悪い。

本当にあの子は天然の鶏だ、と思ってしまう事が多々ある。

でも思っている人は私以外誰もいない。と、思う。

そんな事を思っている間に、また翔耶が息を切らしながらやって来た。

今度はちよつと怒っているようだ。

「ちよつと、あっちいゝ！いい加減にしてよゝゝ！！早く来てねって言ったでしょおっ！？」

「え。」

彼女の言葉に圧倒されてしまった。

そんな事さつき一言も言っただけじゃないか。

大体アンタが鶏だからそうなるんだ
がぐるぐる回る。

思考回路で悪口

「ほら行くよ、あっちいっ！皆が待ってるっ！！」

「ちょっと、そんなに引つ張らないでよ！袖が伸びる！！」

「早く来ないあつちいが悪いっ！」

「はい？」

やっぱり、嫌い。

“皆”っていう言葉が、嫌い。

私は一匹狼なんだ、“皆”と一緒にいる権利は無いんだ。と、心の中が叫んでいる。

ずかずかと廊下を早歩きで歩く翔耶の後ろを、私はただ袖を引つ張られながら歩く。

私は地味だから、目立つ翔耶の後ろにいますと思議な目を向けられる。

「あの子誰？」と言っている声が聞こえた。

“逃げ出したい”

そう思った。

その瞬間、私の手は翔耶の手を振り払い、足は屋上に向かっていった。

「ちよつ、ちよつと！？あつちいっ！？どこ行くのおっ！？」

困惑した翔耶の声が聞こえる。

そんなのはお構いなし、私はただ、この場所が好きだけ

バンッ！

「……………え？」

私の視界には見た事も無い世界が広がっていた。

＊第二話に続く＊

第二話「a wonder（フシギ）」

第二話「a wonder（フシギ）」

昼のはずなのに、何故か目の前の景色は夜。
月が青い、木々が鬱蒼としている深い森。

“不思議”

初めてこの場所を見つけた者は誰もが口を揃えて言うはずだ。
周りを見回すと、向こうの方に一人、純白の髪に蒼い瞳をした少年
が立っていた。

人形のような顔をしたその少年は、私に目を向け、自己紹介する。

『僕の名前はライア。よろしく。』

「よ……よろしく……。」

ライアは私が今来た方向を指さして言い放った。

『君はあっちが嫌いなんだろう？人も、世界も、何もかもが。』

一瞬にして心臓を撃ち抜かれた気分になった。

私の感情は表に出さないでいたのに、初めて会った彼には全て分か
っていたのだから。

図星だったのは悔しかったはずなのに嬉しくて、私は思わず、

「……うん。」

と頷いてしまった。

すると彼は、蒼い瞳が隠れてしまふ程目を細めて笑う。
あ……この感じ何処かで……。
考えているうちに彼がまた話します。

『……僕もそう思ってた。だからこの世界に来たんだ。』

「あなたは……昔あつちの世界にいたの？」

『うん。ついこの間まで。』

「ついこの間？」

『そうだよ。僕は君が毎日屋上に来るのを知っていた。……何の為に来ているのか、もね。』

「……！」

『大丈夫。心配しなくても良いよ。僕も君と同じ、一匹狼だったんだから。』

「わ……たし、は……。』

『知っているよ。亜夜奈ちゃん、でしょ？』

「な、何で？……！？」

『僕はずっと見ていたんだ。君が初めて屋上に来た時から』

『

一年前

君が毎日のように屋上に来始めたのは、確か君が一年生の時の夏休み前だったかな。

何か思い詰めた表情をしていたのを覚えてる。

その後すぐに、言葉遣いの悪い女の子が寄って来て、君を引っ張った。

その時その子は君の事を“亜夜奈ちゃん”って呼んだんだ。でもやっぱり君はその子の手を振り払った。

そして、「一人にして」と。

僕は暇だったから、慰めのつもりで君にすり寄った。
・・・もう思い出したかな？

そう、僕はあの時の白猫だよ。

『思い出してくれた？』

「っ。」

言葉が、出なかった。

いや、むしろ出す事が出来なかった。

同時に、「何で関係の無いあなたが私の話に首を突っ込むの？」、「
という気持ちがかみ上げてきた。

ドウシテワタシニハナシカケテイルノ？

『無理しなくても良いよ。だって君はもうこの場所の住人になる事が出来たんだから。』

「住人・・・？」

『そうだよ。この場所はあっちの世界が嫌になった人の為に創られた世界なんだ。』

「私は別に・・・。」

『じゃあ君は、あっちの世界でずっと一人ぼっちで生きていく自信はあった？』

「！」

『逆に、あっちの子達とずっと一緒にいられる自信はあった？』

ライアの眼は鋭い眼光を放つ。

まるで、全てを見透かしているように。

それでも私は、彼が言いたいこと全てを跳ね返す様に言った。

「無いよ。でも、この場所でもずっと一人ぼっちな気がしてならない。」

彼が眼を見開く。

予想外の解答こたえだったようだ。

でも私の想像していた通り、彼は怯まずにこう言った。

『大丈夫。僕がずっと君の傍にいてあげるから。』

・・・嘘だ。

嘘に決まっている。

何をどう言い換えたって嘘は嘘、嘘には変わらない。
また本当の私が叫ぶ。

「・・・帰りたい。」

呟いた声が彼に聞こえてしまった。

その途端、彼の形相が変わった。

さっきの優しい面影などは全く無い、怒りの顔。

そして、彼は私に酷く残酷なことを言ったのだった。

『君は元の世界には戻れない。だから、僕は君をここに閉じ込めることにするよ。』

遠くで、何かが砕け散る音がした。

* 第三話に続く *

第三話「a maze（メイロ）」

第三話「a maze（メイロ）」

『君をここに閉じ込めることにするよ。』

「……………」

あの後……………どうなったんだっけ……………？

何かが砕け散る音が微かに聞こえた瞬間に私の目の前は真っ暗になつて……………。

そうだ、ライアの笑顔が。

歪んでいたんだった。

今私は、ただ暗闇の中にいる。

でも、さっきまで何も無いように見えたこの場所も、所々触つてみると、

コン…………ツ

「…………壁だ……………」

今まで気がつかなかった。

よく見るとその壁は色々な形の赤いピースによって創られている。もつと念入りに調べようと身を屈めていると、後ろから声をかけられた。

『もしもし、もしもし。』

「!？」

『やっとお気づきになられた……。』

「ウサギ……に、タキシード……。？」

『まさにその通りで御座います。ところでお嬢さん、ワインは如何ですか？』

「ちよ、ちよと待つて。先に私の話を聞いてくれない？」

『はて？何で御座いますしょう？』

「ここつて一体どこなの？ここから脱出する方法はあるの？？」

『勿論御座います。ですが……。』

「何よ。」

タキシード姿のウサギは躊躇いながら私の質問に答える。
そういえばさつきから目が泳いでいる気がする。

『……。私共はそれを伝えてはいけないことになって居りまして。』

「……。はあ。」

『あ、ああ、でも、一つだけお教える事が出来る事が御座います。』

「何？」

『実はこの場所は迷路になって居りまして、私共が提供致します項目に一致しますと此処から脱出することが出来る様になって居ります。』

「……。その項目つて何ですか？」

『はい。では只今から私がお嬢さんに質問をさせて頂きます。それに正直に答えて下さいませ。』

「分かりました。」

『では一つ。』

「どうぞ。」

ウサギは蝶ネクタイと襟元を正す。
そして咳払い。

・・・早くしてくれと嬉しいんだけど。

『・・・貴女がこの世界にやって来たのは何時で御座いますか？』

「今日のお昼頃です。」

『初めて貴女が目にした風景は？』

「深い森です。なぜか夜になっていて、月は青でした。」

『その後誰かに逢いましたか？』

「はい。純白の髪に綺麗な蒼い目をした少年に逢いました。」

『彼の名前は？』

「ライア。」

『！！』

ライアの名前を口にした瞬間、ウサギが少しの間動かなくなった。彼は何かに関わっている存在なのだろうか。

「・・・どうかしました？」

『い・・・いや・・・。』

「ねえ、ウサギさん。」

『何でしょう？』

「ライアってこの世界では何者なの？」

『お嬢さん、それは聞いてはいけないことです。』

「どうして？」

『・・・お嬢さんは、彼に何か唆^そされてなどいませんよね？』

丁寧な言葉遣いだったウサギが、急に口調を変えた。
今までとは違って攻撃的な目をしている。

「されてないよ勿論。当たり前でしょ？」

『お嬢さん、』

「ん？」

『合格で御座います。』

「合格・・・って?？」

『・・・簡単に言いますと、お嬢さんはこの迷路を抜ける権利を得た、ということとで御座います。』

「そう・・・ですか。」

『ああそうだ、お嬢さん。』

「何ですか?」

『くれぐれも“彼”の幻想には気をつけて下さいませ。』

「それってどうい・・・!？」

バリーン!

パラパラパラ・・・

ウサギが言い終わった刹那、赤いピースが一瞬にして散らばった。そして、迷路にやって来る前の森に戻っていく。

「・・・ウサギさん?」

ついさっきまで話していたウサギは赤いピース達と共に消えてしまっていた。

残されたのは、私一人。

また一人ぼっちになった私の上空には、さっきと変わらず青い月が輝いていた。

第四話「an illusion（ゲンソウ）」

第四話「an illusion（ゲンソウ）」

一人ぼっちの空の下。

クスツ、クスクスクス・・・

森の奥から聞こえてくる微かな笑い声。
それと同時に流れている何かの音楽。

「誰だろう・・・。」

森の道でへたれ込んでいた私は、急に聞こえてきたその声と音楽に
耳を傾けていた。

音楽のある方向に歩みを進めてみようと思い、立ち上がる。
ふと、音楽が止まった。

『クスクスクス・・・貴女は此処に迷い込んだの？』

透き通るような声。

私を誘う。

「はい。」

『貴女は今お暇かしら？』

「・・・はい。」

『では俺達と一緒に』

「！」

『踊りませんか？』

「ラ・・・イア・・・！」
「・・・久し振り。」

視界に飛び込んできたのは、純白の髪と蒼い瞳の少年
ライアだった。

私を迷路に閉じ込めた相手。

ずっと脱出口を聞き出す為に探していた相手。

そして憎しみをも抱き始めた相手。

その隣に立っているのはさっき私に話しかけた瑠璃色の髪と碧い目をした美しい少女と、緑の黒髪に紅い目をした背の高い少年。

少女の方は睫毛が長く、シフォンのドレスを着ていて、少年の方は光の反射で虹色に見える服を着ている。

彼らは私がライアの名前を知っていたことが不思議なのか、小首を傾げている。

「お知り合いなの？」

「そうだよ、彼女は亜夜奈ちゃんっていうんだ。」

「ふーん・・・。」

「・・・。」

よほど私の事が気になるのか、ライアが話している間も私の事をまじまじと見ている。

碧い目と紅い目から放たれる鋭い視線。

最初に出逢った頃のライアとそっくりで、思わず私の顔は強張る。

「あ、そうだ亜夜奈ちゃん、この女の子はクリア、男の子はシュヴェーアトって言って僕の知り合・・・」

「ちよっと、私はれっきとした貴方の“お友達”でしょ！」

「ライア、お前はちよっと“友人”に対しての扱いが酷過ぎじゃね

えか？
㊦

ドクンツ

あれ・・・？

私の胸の鼓動が高鳴る。

「友達」って一体何なの？」と考えが渦巻く。

「逃げなければ」と悟る。

ドクンツ

再度私の心臓の音が聞こえたかと思うと、私は知らぬ間に

[illegible]

狂ったように叫んでいた。

その時にライア、クリア、シュヴェーアトが皆蔑むように笑ってい

「クスクスクス……さあさあ、早く踊りましょう？ そうすればき

シフォンのドレスを豊やかに広げて誘うクリア。

そうだよ亜夜奈ちゃん、早く踊ろうぜ。

シュヴェーアトも誘う。

服が今までよりも更に強くなった月の光で眩しいくらい綺麗な虹色に光る。

「・・・・・・・・つ。」

意識が朦朧として来た。

彼らの顔が歪む。

彼らは私の手を掴む。

振り払う事も出来ぬまま、真っ赤なキノコの傘の下で踊りが始まる。
ワルツ。

ライアは跪いて私を誘う。

ああ・・・・、さっきの曲と笑い声が聞こえる・・・・。

そう思った直後、

『貴女は此処に来なければ良かったのよ。クスクスクスッ・・・・。』

不意にシュヴェーアートに取り押さえられて身動きが取れなくなる。
そしてクリアはそんな台詞と共にナイフを私に向けて降り下ろ

そこで私の夢は途切れた。

第五話「a question（シツモン）」

第五話「a question（シツモン）」

再度目覚めたときは、私はミルク色の霧の中にいた。

あの恐ろしかったクリア、シュヴェーアート、ライアの姿はもう何処にもない。

「うわっ、冷たい・・・っ！」

今気付いたが、私の爪先が氷のように冷たくなっていた。
ふと、背後に気配。

しかし霧のせいで姿がよく見えない。

「誰？」

『・・・こんにちは、亜夜奈ちゃん。』

「ライア・・・!？」

『・・・どうかした？』

「だ、だってさっき・・・。」

『ああ、さっきのことか。』

「そんな簡単に・・・」

『ちなみに言っておくけど、さっきまでのことは君が目覚めた時には全て消えてるよ。』

「・・・え？」

『だからつまりは、今君が再度目覚めた時点で君と僕以外の人々の記憶と起きたことは消えたんだよ。』

「クリアさんのモシュヴェーアートさんのモ・・・?」

『そう。今この世界は君を中心に回っていると言っても良いんだよ。』

『

・・・えーと。

私が目覚めると今までのことが全て無かったことになり、この世界は私を中心に回っている・・・？
訳が分からない。

でもいいや。

とにかく私が一番最初に知りたいのは。

「ねえ、ライア。」

『何？』

「この世界からどうやって出ることが出来るか知ってる？」

ライアはまたかというようにふつと笑って見せる。

『知ってるよ、当たり前でしょ。』

「じゃあ・・・」と言いかけて止める。

今彼に「教えて」と言ってもその通りに教えてくれる訳が無い。
何たって私を迷路に閉じ込めた人なんだから。

「そう・・・。じゃあもう一つ。」

『ん？』

「何であなたはわざわざ私を迷路に閉じ込めたの？」

『・・・・・・・・！』

目を見開いたまま答えてくれないライア。

珍しく目が泳いで戸惑いの表情を隠せずにいる。

もしかして理由自体が無いの？

まさか。

「ど、どうかしたの？」

『え、い、いや・・・何でも、ない。』

「本当？」

『う、うん。本当。』

「じゃあ最後に一つ。」

『何か質問が厳しくなってきたな・・・。』

そう小さな声で愚痴をこぼすライア。

本当はもつと質問したかったけど・・・いじけられるとこっちが困るから止めておこう。

「私が聞いた全ての事に嘘をつかないで。」

『！？』

「知ってるのよ、あなたの名前が“嘘つき”ってことくらい。」

『・・・っ。』

「じゃあ一つ目の質問。この世界から出られる方法を知ってる？」

『・・・し、知らない。』

「二つ目。あなたは何故私を迷路に閉じ込めたの？あの場所は何処なの？？」

『ちよ、ちよつと待て、質問が増えてるじゃないか！』

「いいから答えて！」

『・・・あの場所は僕が住んでいる宮殿の地下だよ。無限の牢獄みたいな所。タキシード着たウサギに逢ったでしょ？あれは僕の召使だよ。』

・・・。

ライアがちよつとグレてきたかも。

口調が全く違う。

「もう一つに答えて無い。何故私のことを閉じ込めたの。」
『あ、それは……。』

しどろもどろに喋るなんてライアらしくない。
やっぱり理由なんて無かったの？

「ちゃんと最後まで言つてよ！」

『君をあの場合に閉じ込めておけば僕だけが君と話することが出来たからだよ！』

「……えっ？」

『君があのまま閉じ込められていたら殺されそうになる夢なんて見なかった！ずつと僕の前だけにいてくれればよかったのに！！なのに君はもとの世界に帰りたいって……。！！！』
「……っ。」

……駄目だ、対抗できない。

さつきまで私のことを蔑んだ目で見ていたくせに……。
あれも全部嘘だったって言うの……？

『……そうだ、君を連れて行きたい場所があるんだ。来てくれる？』

「え……。うん……。」

『そういえばさつき足が冷たいって言つてたよね？それでも履いてればいいよ。』

そう言つてライアは私の足を白鳥の羽根で包む。

「あ、ありがとう……。」

お礼を言つたその瞬間、ライアは驚くほど優しい笑みを浮かべた。

第六話「a repeat（クリカエシ）」

第六話「a repeat（クリカエシ）」

霧を抜けると、また今までと同じような森に出た。

ただし、一つだけ違うのは、空に輝いていた月が無くなっていたことだ。

「月が・・・無い・・・？そんな、何で!？」

私が動揺しているのを見かねたのか、ライアは溜め息を一つついて言った。

『僕が連れて行きたい所は、月だよ。』

「え?・・・っ!？」

ザアッ!

瞬間、風が吹いてまた霧に包まれた。

目をぎゅっと瞑る。

危うく飛ばされそうになるが、ライアが手を握っていてくれたおかげで何とか留まることが出来た。

『・・・ほら、目を開けて、亜夜奈ちゃん。』

「・・・!嘘でしょ・・・!？」

目の前には今まで見ていた真っ青な月。

前に見たときとは景色とは少し違って私の足元はそこへ繋がる階段のふもととなっていた。

『ここは“真実の階段”と呼ばれていて、今までの嘘を全て晴らさないと登れないんだ。』

「じゃあ、ライア……。」

『そう、僕はここで全ての真実を君に話すよ。』

「真実……。」

『準備は良いよね？君は真実を知りたかったんでしょ??』

「う、うん……。」

何でだろう……。

折角“嘘つき”であるライアが真実を教えてくれるって言ってるのに。

……
知りたくない。

そんな私に構わず彼は話し始めた

『君は迷路に行った時、僕の召使であるウサギに僕のことを聞いたそうだね?』

「え……あ、うん。だってまだあなたのこと知らなかったから。」

『僕のことをどうして聞いてはいけなかったのか、教えてあげるよ。』

「……。」

苦しそうな表情をした彼はゆっくりと口を開く。

『僕はね、この国の“チャンドラ・マハル月の宮殿”に住むんだ。』

王子な

「え……!?’

『僕の召使のような人々は、僕の存在を君そとの世界から来た人には教えてはいけな事になっているんだ。』

「……もし、教えてしまったら?’

『さあ……。それは僕にも分からない。ただ・・・』

「・・・ただ？」

『随分前に教えてしまった事があつたんだ。』

「それで、その人はどうなったの・・・？」

彼は目を伏せ、いかにも言いにくそうに言葉を放った。

『・・・殺されてしまったそうだよ。』

「！」

昔 ライアの6代前が王子だった頃。

一人の召使がこの世界に迷い込んだ少女に王子の存在を教えたしまった。

結果、少女は真実に辿り着けなかったのだが、大罪を犯したその召使は、王の命令で殺された。

“少女”は、何度も何度もこの世界にやって来る。
でも大概は、“真実”を垣間見ることは出来ない。

『・・・分かるかい？この世界には、未だに解明されていないことが沢山あるんだ。』

「・・・。。。」

『一つは、“少女”は誰のことなのかということ。』

ドクンッ

「・・・っ！」

また心臓の音が響いてくる。

まるで 全ての真実を拒否しているかのように。

『亜夜奈・・・ちゃん？』

ライアが心配して私の顔を覗き込む。

・・・ああ。

もうこの世界に来るのは飽きたのです。

早く、早く・・・。

どうか・・・真実を私に下さい。
でなければ私は。

また真実に辿り着けない

。

ふと、私の思考回路は別の人物のようになってしまった。

“あなたは・・・一体誰なの？”

第七話「the truth（シンジツ）」

第七話「the truth（シンジツ）」

思考回路は訴えた。

「真実を知るべきではない」と。
本性は訴えた。

「真実を知らなければいけないんだ」と。

『亜夜奈・・・ちゃん？』

“少女”は“真実”を求め続けた。
でも駄目だった。

寧ろ無駄でさえあった。

最期は必ず二択だったのだ。

その項目には“元の世界へ戻れる”は無かった。

でも、もし“元の世界へ戻れる”という項目が発生したとして、辿り着けた時、“少女”は何を手にするのだろうか？

幸福か・・・否、絶望であろう。

何故なら彼女は、“ ” だったから。

今、ライアを見つめる亜夜奈の眼は、虚ろで、冷たい。

まるで別人格が存在しているようだった。

もしかすると“ ” が存在しているからかもしれない。

「あなたは・・・一体“誰”なの？」

『・・・っ!？』

ガッ！

覚めた目で亜夜奈がライアに攻撃する。

ライアは先程までとは全く違う亜夜奈の表情によってか動けずいた。

ふと、彼女は思い出す。

“少年”は、“少女”を待ち侘びていた。

「今度はどんな“少女”が来るのか」と、待ち侘びていた。けれど、現れる“少女”が自分の性に合わないとなれば、“少年”はすぐに“見物人”の座から降りる。

そうなる、必ずと言って良い程“少女”は誰かに殺されるかして・
・・死ぬ。

・・・もう、分かり切っていた事じゃないか。

“私”が何者かという事も。

如何して“皆”に溶け込めなかったのかという事も。

それが誰のせいなのかという事も。
全て。

すべて。

「・・・ねえ、教えて・・・？」

『亜夜奈ちゃ・・・』

「早く教えてくれなきゃ・・・また私が消えちゃうじゃない。」

『一体・・・どうしたんだ！？』

「早く・・・早く・・・時間が無い。」

そう、もう時間が無くなってきたしまった。

次の“少女”が来てしまう。

これは逃げられない現象^{ルル}。

しかも“少年”が決めてしまった現象。

『どういう・・・事だよ！？』

・・・・・・。

今回の御伽噺も駄目だったかな。

今度は私がアナタを殺す事になってしまいそうだよ。

・・・いいかもね。

殺されてばかりだしね。

そうだ・・・、最期に聞きたい事があつたんだった。

「ねえ、“クリア”は“翔耶”なんだろう？」

『！？』

「“翔耶”は“クリア”なんだろう？」

『なぜそれを・・・？』

「スカートをいじる癖が同じだったもの。それに・・・顔も似ていたから。」

『そうか・・・。』

「もついいの？」

『ああ。僕が真実を教えなくても、今の君は全て分かっているんだろう？』

「・・・ええ。だって私がこの世界に来る最期の亜夜奈だから。」

『やっぱりね・・・。無限ループからやっと脱出できるって訳か。』

「そうだよ。」

翔耶・・・いや、クリアが“少女”である“繰り返す人”Ⅱ“亜夜

奈”に近づかなければの話だけねど。

そんな事を考えていたら、ライアが寂しそうな眼をして言った。

『良かったじゃないか。・・・もとの・・・世界に戻るんだろう？』

「・・・どうかしたの？」

『僕は・・・。』

冷やかな目。

まるで全てを知っているとでも言うように向けられる。

そして、やはり放たれた言葉。

「知ってるよ。」

ボーッ

不意に、汽笛が鳴った。

その音に敏感に反応したライアは力強く言った。

『あれに乗らなきゃいけない。』

「この階段は・・・？」

『大丈夫。もう使える。』

「そう・・・。」

『行こう、亜夜奈。』

知っているよ。

分かっているよ。

全ては貴方が招いた事だから。

今度はちゃんと結末に辿り着けるのかな。

そうだと良いな。

月の宮殿の王子と“繰り返す人”である亜夜奈は階段を駆け上がり始めた。

第八話「a mystery（シンピ）」

第八話「a mystery（シンピ）」

階段を上り切ると大きな船が現れた。
でもそれは。

「三日月・・・??」

クスツとライアが笑ってから言う。

『さっき言ったでしょ。“僕が連れていきたい所は月だよ”って。』

「あ・・・そうか。」

『これは“神秘の船”って言う名前なんだ。月が船なんておかしいけどね。』

「これに乗るの?」

『うん。君が帰る前にこの国を見せたいんだ。』

「え、私でいいの・・・?」

『勿論だよ。』

そういえば今までの“亜夜奈”はここまで辿り着いた事が無い。

寧ろさっきの“真実の階段”なんてものも見ただ事が無かった。

“亜夜奈”が繰り返してきた中で初めて見るものがこんなにあったなんて。

驚きが隠せない。

感情が揺らぐ。

その時。

ブワッ！

一瞬にして目の前が真っ暗になった。
嗚呼、またやってしまった。
今度はどんな・・

「え・・・！？」

目の前にライアがいる。
嘘だ。

今までこんな事一度も無かったのに。
私を蔑んだ目で見ていたのに。
私を突き落としたのに。
私を殺したのに！

ゴーン・・・ゴーン・・・

鐘の音が響く。

気が付けば足元は時計の中心になっていた。
ライアは針の先に立っていて私の周りをぐるぐる廻る。

嗚呼、如何して？

何故よ、亜夜奈。

貴女達はもう消えた筈なのに。

未だ私を苦しめる。

でも。

此れを乗り越えなければ“結末”には辿り着けない。

タツ！

覚悟を決めてライアのもとへ走り出す。
回る針のせいで足が縛れる。

ズルッ

「わ・・・っ！？」

『亜夜奈・・・！』

墮ちる

嫌だ。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ

！

此处で墮ちたらまた全てが水の泡になる！
やっと此处まで辿り着いたのに！
もう墮ちるのは嫌だ！！

「・・・え？」

足元は、真っ暗闇。

何度も何度も墮ちた場所。
でも今私は墮ちていない。
何故なら。

ライアが私を助けてくれたから。

『・・・大丈夫？』

「如何して？」

『ん？』

「如何して私を助けたの？」

『・・・今度の君は、結末に辿り着かなきゃいけないから。』

「そんなの何時決めたの？」

『ついさつき決め・・・！？』

「今まで・・・私を助けた事なんて・・・無かつたくせに・・・！」

『亜夜・・・奈？』

涙が溢れる。

そつえば涙を流した事が無かつた気がした。

・・・何故だろう？

ポタツ・・・ザアツ！

「！？」

『この風は！？』

涙が地面に零れた途端、突然風が吹き

暗闇が、無くなっ

た。

私の涙によつて消されたのだ。

「嘘・・・こんな事・・・一度も無かつた・・・自分で暗闇を断ち切るなんて事・・・。」

『神秘の船が助けてくれたのかな。』

「・・・どういう事？」

『昔から船の周りでは不思議な事が起きているんだ。だからこの船の名前が“神秘の船”になった。』

「そつ・・・なんだ。」

『どうかした？』

「今まで・・・あの暗闇で私の事を突き落としてきたのは確かに貴方なのに・・・まだ分からなくて・・・。」

『ああ、何で助けたのかって事？』

「うん。」

『さっき言ったはずだよ。“今度の君は、結末に辿り着かなきゃいけないから”って。』

「罪滅ぼしでもするつもりなの？」

『・・・そういう訳じゃ無い。他に理由があるんだ。』

「何？」

『“ライア”という人物は、君がやって来る時必ず生まれ変わるんだ。』

「・・・！」

『僕はただ、今まで先祖がしてきた事があまりにも残酷だったから助けてあげたいと思っただけ。』

「じゃあ、如何して私を迷路に・・・。」

『“先代”から命令が下ったから。あの二人に逢わせるまでは全て今までと同じにしろと。』

「あの二人って・・・クリアとシュヴェーアトの事？」

『・・・ああ。この世界のルールとして、“少女”は必ず一度は彼らに逢わなきゃいけない事になっているんだ。結末がどうであれね。』

「私はずっと・・・貴方が悪いんだと思ってた・・・。」

『良いんだよ。そう思うのが普通だったんだから。』

「でも・・・！」

『僕の先代達も、君に憎まれ続けてきたんだ。それに終止符を打てるのが僕だなんて思っても見なかったけど・・・凄く・・・光栄な事だと思っているよ。』

「・・・っ。」

“少年”は“少女”を待ち侘びていたけれど、ただ楽しかった訳じゃなかった。

“少年”は生まれ変わり続けてきた。

“少女”がやって来ると共に生まれ変わり、“少女”と共に朽ちる。
それがこの国での決まっていた現象^{ルール}だったのだ。

グイッ

『もうすぐ船が出港する。行くよ。』
「・・・うん。」

私の涙の後はすっかり消え、代わりに涙が落ちた地面に、一輪の花
が咲いていた。

第九話「a liar（ウソツキ）」

第九話「a liar（ウソツキ）」

“少年”は生まれ変わり続けた。

でもそれは必ず“少女”の為であり、自分の為では無かった。

“少年”はふと思った。

“少女”によって自分の運命が変わってしまっているのではないかと。

その為には“少女”を消さなければならぬのではないかと。
だから“少年”は“嘘つき”になり、“少女”を騙し続けて来た。

しかし“少年”の望みが叶う事は無かった。
その現象は永遠ルルに続くものだったから。

“少年”は段々とその現象に飽きてきた。

否、疲れたのだ。

“少女”の為に何故自分までもが生まれ変わらなければならないのか。

疑問さえ浮かんで来た。

それでも“少女”はやって来る。

抗えない現象。

“少年”は苦しかった。

だから、“次で終わりにしよう”と決めた。

事の始まりは“自身の寂しさ”だったと気付かずに

。

ポーツ

出港の汽笛。

船に乗った時、ライアが溜め息をつきながら言った。

『・・・僕の先祖はきつと、独りだったのが寂しかったんだと思うよ。』

「だからって・・・作れば良い話じゃないの？」

『“友達”を？』

ドクンッ

心臓が大きく鳴る。

何でこんなに苦しいんだろう。

何でこんなにこの言葉が嫌いなんだろう。

嗚呼、そうか。

“お友達になろうよ。”

“少年”のせい・・・だったのか。

「・・・ねえ、ライア。」

『何？』

「貴方の先祖は如何やら私にトラウマを残していったみたいよ。」

『・・・どういう事？』

真剣な眼差し。

その眼差しからは本当に私の事を心配してくれている事が分かる。

「“私”は、“貴方”に逢うとまず最初に必ず“お友達になろう”

って言われたの。」

『！』

「何か心当たりがあるの？」

『・・・僕、言って無いっけ。』

「そうだけど・・・？」

私が見ても分かる程の戸惑いの表情。

ライアが妙に淡々とした口調で言った。

『僕の・・・僕のせいで結末が変わってしまうかもしれない。』

「え？」

『もしくは、僕のせいで結末が変わってしまったかもしれない。』

「意味が分からないんだけど・・・？」

疑問を投げかける私を無視する様にライアは話を続ける。

先程とは裏腹に真剣な表情に変わった。

『ねえ、君はもしもこの世界から帰れなかった場合・・・どうするの？』

「え、えーっと・・・わ・・・分からない。」

『そう・・・。』

「どうしたの？さっきから何か変。」

『そんな事、無い。』

「嘘でしょ・・・？」

『・・・っ。』

暫しの沈黙。

貴方は如何して、全ての事を自分の中だけに仕舞って置くの？

貴方は如何して、其の事を私に教えてくれないの？
貴方は如何して……。

前にも此の台詞を聞いた事が或る気がする。

……嗚呼。

また私は還れないのだろうか。

また……か。

沈黙が破られた。

ライアが口を開いたからだ。

しかし口調はさつきとは打って変わって緊張気味。
そして、紡がれた言葉。

『……君の事を信じてても……良い？』

「な……っ!？」

突然の台詞に驚く。

まさかこんな事を言うなんて思いもしなかった。

と、私が呆気に取りられているのにも気付かず、追い打ちをかけるように話を続ける。

『駄目、かな……。』

「そ、そんな事は無いけど……。」

『僕は多分……大罪^{タプライ}を犯した。』

「え……。？」

『……言つたでしょ？ “あの二人に逢わせるまでは全て今までと同じにしろ”と命令が下つたと。でも僕はそれを守れなかった。』

「じゃあ、貴方は如何なるの……？」

『消されるんじゃないかな。』

「そんな・・・！」

『でも違うかもしれないよ。』

ライアは何時もよりも増して優しい瞳をして言う。

・・・止めてよ。

止めてよ、その眼。

貴方が消えるなんて私は嫌だよ。

こんな事言っただけなのに分らないけど、

貴方には消えて欲しくないよ。

第九話「a liar」(ウソツキ) (後書き)

次回、最終回の予定です。

第十話「a n e n d（ケツマツ）」

第十話「a n e n d（ケツマツ）」

“少女” 亜夜奈は永遠に続くループに疲れ、そして人を信じられなくなっていた。

それでも抗えないループの中を巡り続けた。

彼女は苦しかった。

しかし、それは段々と“真実の結末”に辿り着ける事を暗示していたのだ。

だが、それでも彼女の前には最後の難関が待ち受けていた。

“元の世界に還れないかもしれない”

彼女にとっては何時もの事だったが、今回は違う。

“少年” ライアが“最期”と決めたから。

彼女はこれで永遠のループを脱出できる。

はずだった。

彼は重大なミスを犯していたのだ。

“クリアとシュヴェーアートに逢うまでは台詞動作全てを同じにする”

これが彼に与えたルールだった。

彼は昔からこのルールに従って生きていた。

しかし、今回の彼は亜夜奈に最大の苦しみを与える台詞を忘れていた。

「お友達になろうよ」という、台詞を。

ルールを守れなかった彼は罰せられる。
罰せられるとはつまり、消される事。
今までにも罰せられた事はあった。
が、今回だけは嫌だった。

何故なら、亜夜奈が還るのを見送ってたかったから

「・・・それで？消えちゃうとしたら・・・何時なの？」

『君が還ってから・・・だと、良いな。』

「分からないの!？」

『・・・うん。僕にはそれを決める権限は無いから。』

そう言つてライアは寂しそうに笑う。

嗚呼。

私は彼を苦しめる事しか出来ないのでしょうか。

私が彼を救う事は無謀なのでしょうか。

私は彼を救いたいと願つてはいけないのでしょうか

“ 変わらないものなど無い ”

ふと、声が聞こえた。

しかし船の上なので周りにはライア以外の人の気配など無い。
でも、確かに聞いたのだ。

・・・もしかしたら。

スッ

「貴方が・・・。」

『・・・神秘の船が如何かしたの？亜夜奈。』

「この船が今教えてくれたの。」

『え？』

「“変わらないものなど無い” って、私に教えてくれた。」

『それってどういう・・・。』

「だから、いくら今回で物語を終わらせようとしても、また新たな物語が生まれるって事だよ。」

『そんな馬鹿な・・・！』

「嘘じゃ無い。ちゃんとこの船が教えてくれたもの。」

『いくら神秘の船であっても、そんな事はあり得ない！』

「ライア。」

『・・・っ。』

いつになく真剣な表情。

ライアは言葉を失う。

「私はこの世界でもう最後なんだって決めつけてた・・・でも違ってたんだよ。」

『・・・。。。』

「また繰り返さなくちゃなくなる。それは貴方も同じ。」

『亜夜奈・・・。』

「何？」

『それは・・・“また逢える” って事・・・なのかな。』

「・・・分からない。でも、可能性は高いと思う。」

『そっか・・・。』

彼はホッとしたのか、笑顔になる。

それを横目で見ながら、亜夜奈は言った。

「ライア。私が還れる所まであと少しだよ。」

『そう・・・だね。』

「私、ライアには消えて欲しく無い。」

『え?』

「ライアがいなくなるのは嫌だ・・・。」

『何言つて・・・!?!?』

亜夜奈の頬に温かい雫が零れる。

二度目の涙。

彼女はライアが消えるのが嫌だった。

それを止める事が出来ない自分も嫌だった。

最初は彼に対して憎しみを抱いた。

しかし真実を求めるにつれて彼の優しさを知った。

感謝の涙が溢れる。

止めようと思えば思うほど止まらなくなる。

「っ・・・有難う。」

『・・・っ。』

「それと・・・ごめんね?」

・・・苦しい。

彼女にこんな思いをさせるつもりは無かったのに。

嗚呼、もうすぐ彼女は還ってしまう。

そしてまた、新しいループへと変わって行く。

消えると分かった時、どれほど絶望しただろう。

「消えて欲しく無い」と言われた時、どれほど救われただろう、嬉しかっただろう。

僕は。

僕は

“貴女を守りたかったただけなんだ。”

目の前が光り出す。

そうか、もう還れるのか。

良かったね、亜夜奈。

『さよなら。』

二人は眩い光に包まれ、この不思議な世界から消えた。

「・・・あれ？」

目覚めると、そこは学校の屋上。

そっか・・・還って来れたのか。

夢・・・だったのかな？・・・ううん、きっと違う。

確かにあの“世界”は存在した。

出逢った人も、物も、全部そこにあった。

・・・ああそうだ、また次の準備をしなくちゃね。

タッタッタッタ・・・

彼女の還った世界には“安藤翔耶”の姿は無かった。

しかし、彼女が屋上を出て行く姿を、蒼い目をした真っ白な猫が優しい瞳をして見送っていた。

第十話「a n e n d」(ケツマツ)「(後書き)

次回本当の最終話、エピソードです。

エピソード「a boy（ショウネン）」

エピソード「a boy（ショウネン）」

“少年”は猫になりました。

何故なら“少女”が「消えて欲しく無い」と願ったから。

“少年”は優くなりました。

何故なら“少女”が可哀相だったから。

“少年”は悲劇を止めました。

何故なら“少女”が大好きだったから。

“少年”は 僕を嫌いました。

僕を憎みました。

僕を殺しました。

何故なら“少女”が“少年”に怯えていたから。

素敵な結末だと思った？

僕がこんなにも苦しいのに？

無理な結末だと思った？

僕が手を出していないのに？

真実に辿り着けたと思った？

まだ話は終わっていないのに？

楽しく無い、楽しく無い。

そうだね、僕はただの s p e c t a t o r 《観覧者》。
でも最後に一つだけ聞いてね？

僕はね、初代の“少年”^{ライア}だよ。

この世界の“創始者”だよ・・・？

僕は仲間が欲しかったんだ。

僕はお友達が欲しかったんだ。

けどね、僕だけは何時まで経っても、

“ひとり”。

W o r d s b y s p e c t a t o r .

エピソード「a boy」(ショウネン)「(後書き)

ご愛読有難うございました。

次回作にご期待下さい・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7133o/>

ひとり。

2011年2月27日12時33分発行